

90 柳宗理とイサム・ノグチ (2021年12月2日)

前回、パリ装飾芸術美術館の現代作品の常設展示にあるシャルロット・ペリアンの作品をご紹介します。( <https://www.fr.emb-japan.go.jp/files/100545677.pdf> ) これらの作品が展示されている「STEPH SIMON, LA GALERIE RIVE GAUCHE」は、工芸技術者のステフ・シモン(1902-1982)が1956年にパリのサン=ジェルマン通りに開いたギャラリー(1974年閉店)で扱っていたデザイナーの作品が展示されています。このギャラリーは、当時のモダンな家具インテリアの促進の先駆け的な存在だったそうです。

ここで、日本の工業デザイナーの柳宗理(1915-2011)の代表作「バタフライツール」や「エレファントスツール」を見ることができます。柳宗理は、民芸運動(\*)を主導した柳宗悦の長男で、戦後の日本の工業デザインの発展に大きく貢献しました。柳は、高速道路のトンネルの坑口や橋といった大型インフラを手掛ける一方で、家具や電化製品のデザインも行いました。柳宗理がデザインしたキッチン用品は、今でも人気があります。

柳は、シャルロット・ペリアンが1940年に訪日した際に、彼女の国内視察旅行に同行し、ペリアンと個人的な親交がありました。シンプルで機能的なデザインは、ペリアンと共通するものが感じられます。



同じ場所には、彫刻家イサム・ノグチ(1904-1988)による「Akari」も展示されています。ノグチは、日本人の父とアメリカ人の母を持つ日系アメリカ人で、独自の哲学で彫刻作品を作り、造園家やインテリアデザイナーとしても活躍しました。ノグチは、1920年代にパリに留学した際に彫刻家のコンスタンティン・ブランクーシに学び、彼の影響を強く受けたとされています。

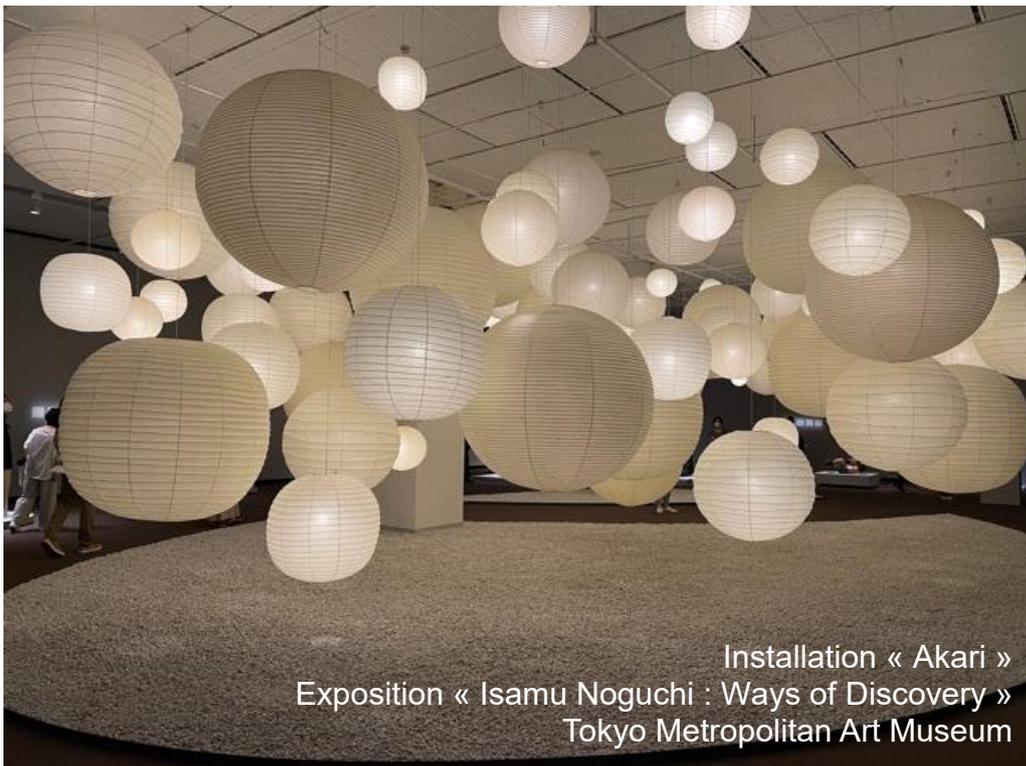
## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

Akari とは、日本語では文字通り照明のことです。彫刻と言うと、石や金属で作られたものを想像しますが、ノグチによれば「Akari」は、和紙と竹で作られた光の彫刻です。彫刻とは何かを問い続け、日本の文化的な背景も持つノグチならではの作品と言えます。



これらの作品から 1960 年代から 70 年代頃にデザインの世界で、フランスと日本はお互いに影響を与えていたことが伺えます。

\* 民芸運動とは、無名の職人が作った民主的な工芸品である「民芸」の美を発掘して紹介する運動。



Installation « Akari »  
Exposition « Isamu Noguchi : Ways of Discovery »  
Tokyo Metropolitan Art Museum

パリ装飾芸術美術館（仏語と英語のみ）

<https://madparis.fr/>（仏語） <https://madparis.fr/en/>（英語）

「Steph Simon, la galerie Rive gauche」について

<https://madparis.fr/en/museums/musee-des-arts-decoratifs/itinerary/design-collections/steph-simon-the-galerie-rive-gauche/>（英語）